



看護師との協働による要介護・要支援者に対する療養支援ネットワーク構築

研究分担者 三嶋 一輝

福井大学医学部附属病院 医療支援課 総括医療ソーシャルワーカー

研究要旨

本研究は、HIV感染症患者の長期療養を支えることを目的に、エイズ治療拠点病院における人材育成および地域連携の強化を推進している。相談支援機能の強化として、令和5から7年度にHIV診療チームの看護師および医療ソーシャルワーカー（以下MSWとする）を対象とした協働シンポジウムをオンラインで実施し、各回全国から約200名が参加した。また、令和6・7年度には心理職とMSWの企画を開催し、各回約170名の参加があった。これら職域を超えた協働企画は事後アンケートでも高い評価を得ており、結果を踏まえたプログラム改善を行いながら継続している。複雑な課題を抱えやすいHIV感染者の長期療養支援において、専門職連携の促進に大きく寄与する取り組みと考えられる。今後は、在宅介護や退院支援の強化を見据え、MSWとケアマネジャーの連携企画や中核拠点病院MSWを中心とした会議・研修を実施し、全国的な療養支援体制の均てん化を図る必要がある。

A. 研究目的

本研究の目的は、HIV感染症の医療体制の整備に資することを目指し、要介護・要支援状態にあるHIV感染症患者に対する療養支援ネットワーク構築に向けた課題を明らかにすることである。HIV感染症は治療の進歩により長期療養時代を迎えており、患者からは加齢に伴う要介護状態への対応をはじめ、生活習慣病（高血圧、脂質代謝異常、糖尿病等）の治療および生活指導、がん終末期における緩和医療・緩和ケア、さらには親族の介護や自身の終活に関する相談など、多様かつ複合的な生活課題が寄せられている。

これらの相談の主な窓口となり、適切な支援担当者や関係機関へとつなぐ役割を担っているのが、全国のエイズ治療拠点病院に配置されている看護師およびMSWである。エイズ治療拠点病院は、その整備目的や歴史的背景から、地域医療における中核的医療機関としての役割を担っており、所属する看護師およびMSWは、HIVを含む多様な疾患や生活課題に対して、地域性を踏まえながら社会資源を把握・開拓し、支援を実践している。

エイズ予防指針においては、「地方ブロック拠点

病院及び中核拠点病院に、HIV感染症・エイズに関して知見を有する看護師、医療ソーシャルワーカー等を配置し、各種保健医療サービス及び介護・福祉サービスとの連携を確保するための機能（以下『コーディネート』という）を拡充することが重要である」と明記されており、両職種の配置および連携機能の重要性が示されている。また、HIV診療においてはチーム医療が推奨され、診療報酬上も加算対象として位置づけられている。一方で、看護師とMSW相互の協働（コラボレーション）の具体的なあり方については、十分に言及されていないのが現状である。

そこで本研究では、エイズ治療拠点病院における看護師およびMSWの役割分担や協働の実態を把握し、課題を整理することを目的としてシンポジウムを開催した。さらに、シンポジウム終了後には、両職種の連携・協働のあり方を探索的に評価するため、事後アンケート調査を実施した。

B. 研究方法

令和5～7年度

●対象：全国のエイズ治療拠点病院に所属する看

護師・MSW

●方法：令和5年度は「第3回 エイズ治療中核拠点病院と地域医療機関との連携による支援体制の構築とケアの実際」、令和6年度は「第4回 エイズ治療中核拠点病院における受診・治療継続支援体制の構築とケアの実際」、令和7年度は「第5回 エイズ治療拠点病院における支援体制の構築とケアの実際」をテーマとして、オンライン形式によるシンポジウムおよび総合討論を実施した。参加申込み時には、事前アンケートとして「総合討論で聞いてみたいこと」および「今後テーマとして取り上げてほしいこと」について自由記載で収集した。シンポジウム終了後には、参加者の属性、HIV患者支援の経験、シンポジウム内容に対する評価等を項目とした事後アンケート調査を実施した。参加申込みは先着順とし、定員は100名とした。申込みはインターネットおよびQRコードを用いて受け付け、案内チラシを全国のエイズ診療拠点病院へ郵送した。申込み締切は、各シンポジウム開催の1週間前とした。

令和6・7年度

●対象：全国のエイズ治療拠点病院に所属する心理職・MSW

●方法：令和6年度および令和7年度に、「エイズ治療中核拠点病院における先駆的連携活動の実際」をテーマとしたオンライン形式のシンポジウムおよび総合討論を実施した。参加申込み時には、事前アンケートとして「総合討論で聞いてみたいこと」および「今後テーマとして取り上げてほしいこと」について自由記載で収集した。シンポジウム終了後には、参加者の属性、HIV患者支援の経験、シンポジウムの評価等を項目とした事後アンケート調査を実施した。参加申込みは先着順とし、定員は150名とした。申込みはインターネットおよびQRコードを用いて受け付け、案内チラシを全国のエイズ診療拠点病院へ郵送した。申込み締切は、各シンポジウム開催の1週間前とした。

<倫理面への配慮>

取り扱う情報に関して、個人が特定できないよう十分配慮した。アンケートの回答前にアンケートの目的などを説明して、その趣旨に賛同頂ける方に協力依頼をした。

C. 研究結果

令和5年度～7年度

1. 看護師・MSWを対象としたシンポジウムの参加

申込者は第3回253名、第4回277名、第5回262名あり、参加はそれぞれ190名、223名、200名であった。事後アンケートには、第3回が161名(84.7%)、第4回が191名(85.6%)、第5回が167名(83.5%)から回答が得られた。

2. 事前質問の内容

シンポジウム申し込み時に、事前アンケートに、「総合討論で聞いてみたい内容」を自由記載として設けた。その結果、第3回は15名、第4回は19名、第5回は29名から質問が得られた。内容は看護師とMSWの協働に関するものと、直接支援に関するものに大別された。

事前質問の内容からシンポジウムのテーマに沿った質問を優先して複数取り上げ、シンポジストおよび参加者から指定発言者を選定した。取り上げきれなかった質問は、シンポジウム報告書にQ&Aとして掲載した。報告書は案内チラシを配布した全国拠点病院および参加者のうち送付希望者に配布することとした。

①総合討論で取り上げた質問

(第3回)

・高齢化や他疾患併存に伴う地域施設、訪問看護などの受け入れ先拡大の取り組み

・医療連携における患者の意向を反映させるための工夫や院内外の多職種連携の工夫や苦勞について
(第4回)

・複数の課題を有するHIV感染者を支援する上で難しい点や場面、工夫について

・長期療養を支えるために患者へどのようなアプローチをしているか、家族との関わりや工夫点、Nsとの具体的な協働について

(第5回)

・HIV感染者の支援ではプライバシーへの配慮も含め、様々な局面での意思決定支援が重要であり、多職種協働でチームとして支援する必要があると思うが、その体制構築による効果や課題について教えて欲しい。

・今回の事例では、認知機能は保たれていましたが、PMLの病状悪化などにより認知機能が低下した場合のHIV陽性者の意思決定支援について教えて欲しい。

②Q&Aに納めた質問

（第3回）

- ・チーム内におけるコミュニケーションについて
- ・相談窓口（コーディネーターNsやMSW）の院内周知方法
- ・セクシャリティーや性について面接や地域連携の際の押さえるべき配慮のコツ

（第4回）

- ・孤立・孤独対策について
- ・抗HIV薬服用中での転院受け入れ先や調整方法
- ・周囲からHIVへの差別・偏見に対して不安があり、制度申請に難色を示した場合の説明や声掛けの仕方

（第5回）

- ・家族への告知支援・・・病名を誰にも言いたくないことはよく聞かすが、家族や親族に病名告知しないといけない時が訪れた場合には、どのように支援するのが良いか。
- ・地域連携
- ・高齢者支援

3. 事後アンケート結果

①勤務地は多い順に「関東・甲信越」、「九州」、「中国・四国」、「北陸」、他であった。患者数の多さに連動する傾向がみられた。「関東・甲信越」の拠点病院による報告の回は「関東・甲信越」の割合が増え、「北陸」が減るなど、テーマに連動する傾向があるものの、全国からより均一な参加状況となった。

②第3回から第5回とも職種は看護師とMSWはほぼ半数ずつを占め、所属は医療機関が殆どであった。

③HIV支援経験について「あり」が多く、支援時期は、「現在」が半数を超えていた。拠点病院であっても、支援経験のない看護師またはMSWが存在していた。支援の時期は「現在支援中」が最も多かった。

④参加動機は「関心あるテーマだったから」が最も多く、次いで「HIV感染症患者を担当しているから」、「職場・関係者から勧められたから」であった。看護師とMSWの連携に関心があり、連携について学びたいという意思があることが分かった。職場から勧められて参加した割合は、各回とも看護師がMSWより多かった。

⑤シンポの満足度について、「テーマ」・「講義内容」・「総合討論」・「WEB形式」のいずれも「大変良かった」「良かった」が各回9割以上を超えた。

⑥次回参加希望について、ほぼすべての参加者が

「また参加したい」を選択した。

4. 事後アンケート自由記載から

第3回から第5回の参加者から自由記載を得た。内容は次のとおりである。

①意見や感想

「全国の仲間に来て力が湧きました。」「各施設の取り組みが聞けてとても良いです。」「事例があるためわかりやすいです。」などの意見が多数みられ、各回看護師とMSWの協働を学ぶ貴重な機会となったことが明らかとなった。その一方で、地域連携の基盤となる看護師とMSWの協働の重要性は理解した上で、HIV特有の課題についてより具体的な解決策を求める声があることも明らかとなった。「地域から受け入れの難しさがあつた際に、具体的にどんな理由か、受け入れ後にどんな変化があつたか、新たな課題があつたかなど具体的に教えていただけると、今後の支援の参考になると思いました。」「成功例ではなく困った事例から課題を検討する場にしたい。例えば東京都内の緩和ケア病棟はHIV陽性者を受け入れしていないところもまだ多く、HIV診療拠点病院の緩和ですら断るところもある。中核拠点がどのように働きかけしているのか全く見えない。全国区ではなく地域を絞って課題を話し合える場をセッティングしてほしい。」などの意見がみられ、課題が明らかとなった。

②今後の企画に希望するテーマ

第3回では、「高齢化」「ACP」、「行政との連携」があり、特に「他職種連携」では、翌年度の企画となる「MSWと心理職の連携」が挙げられた。さらに、シンポジウムで共有できたHIV患者の療養環境整備に共通する課題や取り組みをまとめ、連帯して行動・運動しようとする意識がみられた。さらに、第4回では、「受診中断はまた取り上げて欲しい。」「長期療養されているHIV陽性者の認知機能低下による受診中断、服薬中断への支援、または病名を打ち明けてない、独居のHIV陽性者が認知機能低下による受診中断・服薬中断への支援」など中核拠点病院の看護師とMSWは、受診中断や多重課題を抱えるHIV陽性者の支援の困難さに直面しており、より具体的な解決策を模索していた。以上の結果は全参加者の一部であり、他の参加者の評価や感想が得られていないことが課題であるが、得られた意見をもとに今後の企画、運営を検討する必要がある。

令和6年・7年度

1. 心理職・MSWを対象としたシンポジウムの参加

申込者は第1回が216名、第2回が222名あり、参加はそれぞれ168名、167名であった。事後アンケートには、第1回が134名（79.7%）、第2回が147名（88.0%）から回答が得られた。

2. 事前質問の内容

シンポジウム申し込み時に、事前アンケートに、「総合討論で聞いてみたい内容」を自由記載として設けた。その結果、第1回は18名、第2回は24名から質問が得られた。内容は看護師とMSWの協働に関するものと、直接支援に関するものに大別された。

事前質問の内容からシンポジウムのテーマに沿った質問を優先して複数取り上げ、シンポジストおよび参加者から指定発言者を選定した。取り上げきれなかった質問は、シンポジウム報告書にQ&Aとして掲載した。報告書は案内チラシを配布した全国拠点病院および参加者のうち送付希望者に配布することとした。

①総合討論で取り上げた質問

（第1回）

- ・MSWと心理職が互いに協働する際に心理職に気をつけてもらいたいこと、注意点、普段困っていること、してほしくないこと

- ・派遣カウンセラー制度を活用する場合の現状と課題について

（第2回）

- ・複数の課題を有するHIV感染者を支援する上で難しい点や場面、工夫について

- ・長期療養を支えるために患者へどのようなアプローチをしているか、家族との関わりや工夫点、Nsとの具体的な協働について

②Q&Aに納めた質問

（第1回）

- ・孤立・孤独対策について

- ・MSWから心理職につないだ方が良いと思うポイントや患者のつなぎ方の工夫

- ・高齢化に伴う在宅支援者、施設など地域の社会資源関係者との連携の進め方

（第2回）

- ・孤立・孤独対策について

- ・抗HIV薬服用中での転院受け入れ先や調整方法

- ・周囲からHIVへの差別・偏見に対して不安があり、制度申請に難色を示した場合の説明や声掛けの

仕方

3. 事後アンケート結果 *（）内は、第1回

①勤務地は「関東・甲信越」33.3（31.3）%、「九州」18.4（14.2）%、「中国・四国」12.2（11.9）%、「北陸」10.9（10.4）%、他であった。患者数の多さに連動する傾向がみられた。第1回、第2回とも全国からより均一な参加状況となった。

②第1回、第2回とも職種はMSWが半数を占め、所属は医療機関が殆どであった。

③HIV支援経験について「あり」76.2（86.6）%、「なし」23.8（13.4）%、支援時期は、「現在」75.9（69.3）%、「1年以内」9.8（14.0）%だった。拠点病院であっても、支援経験のないMSWが存在していた。支援の時期は、「現在支援中」が最も多かった。

④参加動機は、「関心のあるテーマだったから」69.4（79.9）%、「現在、HIV患者を担当しているから」61.2（61.2）%、「職場・関係者から勧められたから」13.6（18.7）%だった。

⑤シンポの満足度について、「テーマ」・「講義内容」・「総合討論」・「WEB形式」のいずれも「大変良かった」「良かった」が各回98%以上を占めた。

⑥次回参加希望について、「また参加したい」が、98.6（100）%、「テーマによる」1.4（0.0）%だった。

4. 事後アンケート自由記載から

第1回は111名、第2回は137名から自由記載を得た。内容は次のとおりである。

①意見や感想

「事例がとてもよかった。報告者のQ&Aも実践的でわかりやすく、もっともっと聞きたいと思った。」「MSWと心理職の協働について、これまで取り上げられてこなかったことに驚きました。それぞれの視点から、役割や同一の事例を基にした実践について聞くことができ、大変勉強になりました。基礎知識についても触れていただき、自身の職務を振り返る機会ともなりました。」「お互いの寄って立つ理論や役割について、基本的なことをわかりやすくまとめて話していただき、大変分かりやすかったです。全国のベテランの先生方が質問に答えており、オンライン形式で良かったと思いました。」など肯定的な意見が多くみられ、心理職とMSWの協働を学ぶ貴重な機会となったことが明らかとなった。

その一方で、長期療養における心理・社会的支援の基盤となる心理職とMSWの協働の重要性は理解した上で、各施設で苦慮している事例や具体的



シンポジウム報告書（令和7年度）



シンポジウム報告書（令和6年度）



シンポジウム報告書（令和5年度）

な解決策を求める声があることも明らかとなった。「HANDについて勉強になった。元々発達障害みたいなものがあった方なのか、HIVにより脳機能が障害されたのか支援に苦慮する方がいる。」「就労支援を丁寧に行われていて、さすがだと思います。施設への出前講座など地域への理解を促す活動をしているからこそ、『病名を伝えると就職は難しい』と言われる事が無いのだろーと思います。一昨年に、地域の方にも当院でのHIV研修参加を呼び掛けましたが、応募されたのは2名で、実際には参加されませんでした。コロナ禍を経験し、多少は感染症に対するハードルが下がったように感じますが、まだまだです。」等の意見があった。

②今後の企画に希望するテーマ

今後取り上げてほしいテーマとして、「HAND」、「派遣カウンセラーとMSWの連携」、「HIV診療の機会が少ない方を巻き込んだ企画」、「看護師-MSW-心理師との協働で支援された症例報告等」、「HIV陽性患者対応をしたことがない機関への働きかけ方、当事者の話」などがあり、次回以降の企画の視座となった。

D. 考察

令和5年度から令和7年度に実施したエイズ診療病院の看護師とMSWの役割と協働シンポジウムでは、看護師が患者からの相談窓口として機能し、相談や課題を整理しながら、医療継続を目標にMSWや心理師など必要な職種につなげていた。そのために日頃からのコミュニケーションを心掛けることやMSWなど多職種の視点なども参考にして患者

支援を行っていた。一方、MSWは、病院内における「地域」の窓口で的確に「つなぐ」役割であることを意識していた。社会生活全体に視野を向け、その人らしい生活が送れるよう自己決定を支援していた。看護師は、「院内」の相談窓口としての機能があり、MSWは、「地域」の窓口として役割分担を行っている。この両者を中心としたHIVケアチームが個人の問題を組織や地域の課題として認識し、組織改善や地域開拓の役割を担っていた。

一方、令和6・7年度に実施した心理職・MSWの企画では、両職種が役割分担を行い、連携・協働し患者支援を行っていた。心理職は、心理査定、心理療法、臨床心理的地域援助が業務の中心である。患者や家族、医療者から話を聴き、観察や情報収集からアセスメントを行い、介入のための情報共有を行い、こころのケアを行っているMSWの視点は、クライアントの生活環境や家族等の対人関係、個人が所属する社会的な場所など、その視点は非常に広く様々な対象者がおり、そのエコシステムに注目しながら、環境をアセスメントし、問題解決や希望の実現を調整していた。

看護師とMSW、心理職とMSWそれぞれの企画とも全国から多数の参加があり、テーマへの関心の高さが明らかとなった。オンラインの利便性、時間の適切さも参加しやすにつながった。両職種は協働の重要性を理解し実践しており、直面している課題や予測される課題解決のために、他院看護師・心理職とMSWの協働の取り組みを学ぶ、自院の協働体制構築のために情報収集するなどの意図があると考えられた。初回参加者が多く、かつ2回から5回

の参加者もあり、満足度及び関心が高いシンポジウム結果が得られた。一方で、初回参加が半数を超え、かつ前回のアンケートで「次回も参加希望」が100%だったため、前年度の参加者が今回参加できていない理由の探求や新規開拓が課題である。また、参加ブロックに偏在があるため、今後は、広報の方法や地域性を再考し、シンポジウムのあり方を適正化したい。

本研究で明らかとなったニーズに対応するために、今後の事業として以下を検討したい。

①看護師・心理職・MSWの3職種の連携・協働を前提としたプログラム開発と実施

②長期療養支援や介護連携に協働して取り組んでいるケアマネジャーとMSWを対象とした『協働シンポジウム』の開催

③エイズ拠点・非拠点病院MSWの相互交流を目的とした全国版ネットワーク会議の企画と実施

上記、①～③は、アンケートでも対面開催の要望はあるが、オンライン形式の利点を生かしつつ、対面開催を併用するなどハイブリッド形式での開催を検討する。

E. 結論

令和5年度から令和7年度に実施したシンポジウムからは、HIV感染症患者の長期療養体制構築に向けて、HIV感染症患者の長期療養体制構築に向けて、看護師はHIVチームのハブとして、MSWは地域連携のハブとして機能していた。心理職とMSWについても両者が協働し、患者の心理・社会的支援を図っていた。両者の協働をテーマとした企画・会議は、全国的に関心が高く、また参加者の満足度も非常に高い結果となった。今後も高齢化するHIV陽性者の地域連携・患者支援を担う看護師・心理職・MSWの人材育成のため、地域・職種を超えた連携強化、ネットワーク構築が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

- 1) 三嶋一輝、池田和子、四戸良、木下佑子、羽柴

知恵子、葛田衣重、横幕能行.HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働について～第2回NsとMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～. 第37回日本エイズ学会学術集会・総会.2023年. 2023.12.3～12.5.

- 2) 三嶋一輝、大金美和、宮城京子、木梨貴博、石井智美、高橋昌也、杉野祐子、葛田衣重、湯永博之.HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働について～第3回NsとMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～. 第38回日本エイズ学会学術集会・総会.2024年. 2024.11.28～11.30.

- 3) 三嶋一輝、大金美和、杉野祐子、高橋昌也、高木雅敏、吉田識未、木下佑子、葛田衣重、湯永博之.HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働について～第4回NsとMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会.2025年. 2025.12.5～12.7.

- 4) 三嶋一輝、木村聡太、高橋昌也、北上早紀、富永誠記、高村佳幸、葛田衣重、湯永博之.HIV感染症患者の療養支援に関する心理職とMSWの協働について～第1回心理職とMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会.2025年. 2025.12.5～12.7.

H. 知的所有権の出願・取得状況（予定を含む）

なし